

神の王国をもたらす (2)

召会を建造するための王国の訓練

聖書：マタイ 16:16-18, 21-28

I. マタイ第 16 章で、召会を建造する道と建造の敵が啓示されています：

- A. キリスト、生ける神の子は、岩としてのご自身の上に、ペテロのような造り変えられた人である石をもって、召会を建造します——マタイ 16:16-18。
- B. ハデス [陰府] の門、すなわちサタンの暗やみの権威あるいは力は、召会を攻撃して、主が召会を建造することを妨げます——18 節。
- C. 召会を建造するために、主は死を経過し、復活の中へと入らなければなりません——21 節：
 - 1. 召会はキリストの死と復活を通して生み出されました——ヨハネ 12:24。
 - 2. 召会を建造する道は、十字架につけられ復活させられることです——参照、II コリント 4:10-12. ガラテヤ 2:20。
 - 3. 召会は、十字架を通しての復活の領域においてのみ存在し、建造されます——創 2:21-22. 参照、エペソ 4:15-16。
- D. ペテロは、良い心をもって、主をいさめ、主がエルサレムに行って十字架につけられることを阻止しようとした——マタイ 16:22：
 - 1. 主が召会を建造することを妨げようとしたのは、ペテロではなく、ハデス [陰府] の門の一つ、すなわちペテロの自己の門を通して出て来たサタンでした——23 節。
 - 2. 自己、思い、魂の命は、サタンがそれを通して出て来て、召会を攻撃し破壊する主要な門です——23-26 節。

II. 召会の建造は、三つのかぎを活用することを通して、ハデス [陰府] の門を閉じることにかかっています——マタイ 16:24-26：

- A. わたしたちは自己を否むというかぎを活用することを学ぶ必要があります——24 節：
 - 1. 肉は、罪 (サタンの性質) によって腐敗させられた、創造された体です (ローマ 6:12, 14. 7:8, 11, 17, 20)。自己は、創造された魂にサタンの思い、サタンの思いを加えたものです。
 - 2. サタンの思い、思想が人の魂の中へと注入されたとき、人の魂は自己、すなわちサタンの具体化となりました——創 3:1-6. マタイ 16:22-23：
 - a. エバが善悪知識の木の実を彼女の体の中へと取り入れる前に、サタンの思想、思いが彼女の魂の中へと注入されました。
 - b. エバの思いがサタンの思想によって毒された後、彼女の感情はかき立てられ、そして彼女は意志を活用して、知識の木の実から食べることを決定しました。
 - c. この時には、魂のあらゆる部分 (思い、感情、意志) は毒されていました。
 - d. 自己は魂の命の具体化であり、魂の命は思いを通して表現されます。ですから、自己、魂の命、思いは三一です。

- e. この三つの背後にはサタンがおり、サタンは自己を操作して召会を破壊します——23節。
3. 自己は、神からの独立を宣言する魂です：
- a. 主が重んじるのは、わたしたちが何を行なうかではありません。そうではなく、主が重んじるのは、わたしたちが彼に依り頼むことです——7:21-23. 参照、ヨシュア 9:14。
- b. からだの敵は自己です。自己は独立しているものであるので、自己はからだを建造することによって最大の問題であり、最大の妨げまた反対です：
- (1) わたしたちは神に依り頼むだけでなく、からだにも、兄弟姉妹にも依り頼むべきです——出 17:11-13. 使徒 9:25. II コリント 11:33。
- (2) 主とからだは一です。ですから、わたしたちはからだに依り頼んでいるなら、主にも依り頼んでいます。わたしたちはからだから独立しているなら、自然に主からも独立しています。
- (3) わたしたちが依り頼んでいるとき、自己は消え去り、わたしたちは自己ではなく主の臨在を持ち、平安に満ちます。
- (4) 自己が徹底的に十字架によって対処されたときはじめて、わたしたちはキリストのからだの実際に触れ、からだを認識することができるようになります。
4. 以下は、自己のいくつかの表現です（参照、詩歌 628 番、5 節と 6 節）：
- a. 自己には、野心、高ぶり、自己を高く上げることがあります——マタイ 20:20-28. I ペテロ 5:5. ローマ 12:3. 民 12:1-10. 16:1-3. ピリピ 2:3-4。
- b. 自己には、自分の義、自己義認があり、人を暴露し、批判し、罪定めます——マタイ 9:10-13. ルカ 18:9-14. I ペテロ 4:8. ヨハネ 3:17. 8:11. ルカ 6:37. マタイ 7:1-5。
- c. 自己には、自省と自分を軽んじることがあります——雅 2:8-9. I コリント 12:15-16。
- d. わたしたちは自己の中にいるとき、召会、導いている人、聖徒たちによって感情を害されることがあり得ます——マタイ 6:14-15. 18:21-35. マルコ 11:25-26. コロサイ 3:13。
- e. 自己には、失望と落胆があります——参照、ローマ 8:28-29. II コリント 4:1。
- f. 自己には、自己愛、自己保身、自己追求、自己憐憫があります——マタイ 13:5, 20-21。
- g. 自己には、つぶやきと議論があります——出 16:1-9. ピリピ 2:14。
- h. 自己には、天然の味わいと好みに基づいた天然の感情（友情）があります——マタイ 12:46-50. ピリピ 2:2 後半. I コリント 12:25。
- i. 自己には、意見に固執し、異議を唱えるという事柄があります——ヨハネ 11:21, 23-28, 39. 使徒 15:35-39. 参照、I コリント 7:25, 40。
- j. わたしたちは自己の中にいるとき、個人主義的で独立しています——16:12。
5. わたしたちが自己を否むというかぎを活用して自己を閉じ込めるなら、つまづくことはあり得ないでしょう。つまづかない者は幸いです——参照、ルカ 23:34. 使徒 7:60：

- a. もしわたしたちがつまずくことがあり得るなら、それはわたしたちが自己に満ちていることの証拠です。
 - b. わたしの自己が閉じ込められているなら、あなたがわたしに何を行なっても、あるいはわたしをどのように扱っても、わたしはつまずかないでしょう——ルカ 23:34. 使徒 7:60。
6. わたしたちは自己を否むというかぎを活用して、あらゆる状況において自己を閉じ込めることを学ぶ必要があります：
- a. 状況があなたにとって順境であっても逆境であっても、兄弟たちがあなたを愛しても憎んでも、あなたは自己を閉じ込めなければなりません——Ⅱコリント 12:15。
 - b. 自己が閉じ込められているなら、召会は建造されます。
- B. わたしたちは十字架を負うというかぎを活用することを学ぶ必要があります——マタイ 16:24：
1. 十字架を負うことはただ、神のみこころを負うことを意味します。十字架は神のみこころです——26:39. ヨハネ 18:11：
 - a. 主イエスは犯罪者のように十字架に行くことを強いられたのではありません。主は進んで十字架に行きました。なぜなら、十字架は神のみこころであったからです——マタイ 26:39。
 - b. 主イエスが進んで十字架につけられたのは、彼の死を通して、彼の命が解放され、召会を生み出し建造するためでした——ヨハネ 12:24。
 - c. 十字架は主にとって大きな苦難でしたが、彼は苦難を顧みず、神の定められた御旨を完成することを顧みしました——ヘブル 12:2. コロサイ 1:24。
 2. 「自分の十字架を負い……なさい」（マタイ 16:24）は、わたしたちが強いられて十字架を担うのではなく、進んで十字架を負うことを意味します：
 - a. わたしたちの夫、妻、子供たちは神のみこころであり、それゆえわたしたちの十字架です。
 - b. その一つの召会は神のみこころであり、その召会の中のあらゆる兄弟姉妹は神のみこころです。ですから、十字架を担うことは、その召会を担うこと、またすべての聖徒たちを担って、わたしたちが真の一を持つことです——ヨハネ 17:21-23. エペソ 4:3, 13. Iコリント 1:10. ピリピ 2:2。
 3. わたしたちは自分の十字架を負うだけでなく、自分の十字架を担い続ける必要があります。すなわち、十字架にとどまり、自分の古い人を日ごとに十字架の終結の下にとどめる必要があります——ルカ 14:27. ローマ 6:6. ガラテヤ 2:20. ピリピ 3:10. Iコリント 15:31：
 - a. わたしたちは主の十字架を通して神聖な命を受けました。今や、わたしたちはこの命の中で建造されるために、進んで、また喜んで十字架を負う必要があります。
 - b. わたしたちは自分の味わい、感覚、意識を顧慮すべきではありません。そうではなく、わたしたちは神のみこころだけを、すなわち、わたしたちが真の一を持つことだけを顧慮すべきです——ヨハネ 17:21-23. エペソ 4:3, 13. Iコリン

ト 1:10. ピリピ 2:2。

C. わたしたちは魂の命を失うというかぎを活用することを学ぶ必要があります——マタイ 16:25 :

1. 魂の命を救うとは、魂にその享受を得させることによって、自己を喜ばせることです。魂の命を失うとは、魂の享受を失うことです：
 - a. 神は人を創造して、享受を必要とする魂とならせました（創 2:7）。
 - b. 人の霊の中へと神を受け入れ、魂を通して神を表現することは、人の喜びまた娯楽であるべきです——参照、ネヘミヤ 8:10. ローマ 14:17。
 - c. 主イエスは、この時代に彼の魂の享受を失いました。それは、彼が来たるべき時代に彼の魂の命を見いだすためでした（ヨハネ 10:11. イザヤ 53:12）。わたしたちも同じことを行なわなければなりません（ヨハネ 12:24-26）。
 - d. もしわたしたちがこの時代に自分の魂の命を救うなら、来たるべき時代にそれを失います。しかし、この時代に自分の魂の命を失うなら、来たるべき時代にそれを見いだします——マタイ 16:25。
 - e. わたしたちは主イエスを愛し、自分の魂の命を憎み、否む必要があります、死に至るまでも、自分の魂の命を愛さないようにする必要があります——I コリント 16:22. 2:9. ルカ 14:26. 9:23. 啓 12:11。
2. わたしたちが主のため、召会のため、すべての聖徒のために、自分の現在の魂の享受をすべて進んで失うなら、他の人はわたしたちによって養われ、わたしたちを通して建造されます。これは苦難ではなく、喜びです——ヘブル 12:2。
3. わたしたちが今、主のために自分の魂の命を失うなら、主の再来の時、わたしたちはそれを救い、そしてそれは救われ、得られます——I ペテロ 1:9. ヘブル 10:35。
4. 王国の実現の時に、王の喜びにあずかって地を支配するという王国の褒賞は、わたしたちがこの時代に自分の魂の命を救うか、それとも失うかにかかっています——マタイ 16:25-28. 25:21, 23。
5. 主の出現の時、ある信者たちは主の喜びの中に入り、ある信者たちは泣き叫んだり歯がみしたりして苦しみます。主の喜びの中に入ることは、わたしたちの魂の救いです—— 21, 23 節. 24:45-46。